

目指す学校像	『共働共励、共に育つ』の精神を基に、自分の家族を通わせたい学校を作る
--------	------------------------------------

重点目標	1 主体的・対話的で深い学びの実現 2 心と体の成長に向けた安心安全な学校づくり 3 地域との連携・協働の充実 4 教職員組織の充実
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学校自己評価		年度評価		学校運営協議会による評価		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	<現状> ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数、理科の全てにおいて、全国や県の平均正答率を上回り、学力の定着が図られている。児童は自ら学習の達成状況を把握し、改善に向けて計画を立て実行することができた。 ○学習での話し合う活動に係る評価は、学校評価アンケート「学力向上に関する取組」の項目の中で比較的高く、児童は「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたり」したと9割が考えている。 <課題> ○学校評価の教職員アンケートでは、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組めるような指導」について肯定的回答が9割に達するが、自信をもって「できている」と回答した割合は比較的小さい。 ○ICTの活用について、学校評価の児童アンケートでは肯定的回答が9割に上るが、否定的回答も一定数あり、改善の余地がある。	・学びの個別最適化、探究化に向けタブレットを活用した授業改善 ・第15次研究「学びをいかす子どもをはぐくむ教育課程の工夫改善」に向けた研究の実施	①自律的、探究的な学びを推進するために、各教科等において、デジタル教科書、ドリルパーク、スタディサプリ等のICTを活用した学びの改革を研究し、効果検証を実施する。 ②学力向上カウンセリング学校訪問による全国学力・学習状況調査の結果分析など、各種調査の分析を行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る。	①毎日2時間以上のタブレット活用クラスを9割達成するとともに、各教科等において、児童一人ひとりがICTを活用した効果的な事例を蓄積、授業研究会において実践発表を行ったか。 ②児童の自己採点により現状を把握させるとともに、各種調査の分析を行い、研修内容を修正するなど、学校としての手立てを構築できたか。	①学校評価の児童、保護者アンケート結果によると、9割以上がICT活用を実感している。各研究パートにより、ICTを活用した研究の蓄積、さらには授業研究会において実践発表を行ったか。 ②全国学力・学習状況調査結果から、児童は自らの学習状況を把握した。教員は、結果分析により、学び合う集団づくりのイメージの共有につなげ、学びを「つなぎ、いかす」手立てを構築した。	B	ICTを活用した学びを通して、授業での活用のよさと同時に、課題も捉えられた。効果検証を活かし、タブレット端末の効果的な活用と学びの改革にさらに取り組んでいく。各種調査により、根拠を明確にして、実態把握と授業改善につなげられた。今後も教育データの効果的な活用、「学びのポイント『じ・し・や・く』」等を踏まえた授業研究を行い、学びの個別最適化、探究化を目指す。	・公開研究協議会では、ICTを活用することで、学習を効率的に進めて探求の時間を確保したり、個人の活動を全員が見えるようにすることでより個性を際立たせたりするなど、ICTの長所を引き出した授業が行われていた。 ・学校評価アンケートの「自律的に学ぶ姿」に関する項目で児童が肯定的な回答を多くしていることが評価できる。また、公開研究協議会で実際に子どもが自信をもって、自分から活動に取り組む姿が見られた。 ・ICTを活用するのはとてもよいが、体験的な学習(五感)をバランスよく取り入れることでより良い学びを創出していってほしい。
2	<現状> ○全国学力・学習状況調査での「学校に行くのは楽しい」の質問では、肯定的回答の割合が91.3%であり、全国や県の平均を上回った。いじめ対応に係る学校評価アンケートでは児童、保護者とも9割程度の肯定的回答を得た。 ○昨年度、救急車を要請する児童の事故等が4件あった。また、打撲等のケガをした児童数は、のべ2537人となり、前年度比で300人減少した。 <課題> ○全ての児童が学校に行くのが楽しいと思えるよう、一人ひとりの心身の状況を的確に把握し、教職員が連携協働しながら、組織的に支援・相談できる体制づくりの継続が必要である。 ○学校評価の児童アンケートで一定数の課題があり、児童の主体的な活動を促し、自ら危険を予測し回避するなど、安全な学校生活を送ることが実践力をはぐくむ必要がある。	・児童一人ひとりに寄り添った支援や教育相談体制の充実 ・主体的に安全な学校生活を送ることができる児童の育成に向けた取組の実施	①いじめを含めた生徒指導上の課題を早期発見・早期解決するため、定期的なアンケートや面談等を確実に実施し、児童一人ひとりの状況を継続的に把握し支援する。 ②教育支援・相談に係る校内委員会ではコンピュータ等に蓄積した児童の情報を共有し、適切なタイミングで組織的な支援・相談を実施する。	①学校評価の児童アンケート「いじめを発見した時は先生等の大人に話している(話そうと思う)」において、90%以上の肯定的な割合となったか。 ②学校評価の教職員アンケートにおいて、「学校は、子どもの立場になって、子どもたちに指導し、いたずらや悪ふざけなどをやめるよう声をかけている」の肯定的評価が、前年度比で向上したか。	①学校評価の児童アンケート「いじめを発見した時は先生等の大人に話している(話そうと思う)」において、肯定的な回答が86%であった。 ②学校評価の教職員アンケートにおいて、「学校は、子どもの立場になって、子どもたちに指導し、いたずらや悪ふざけなどをやめるよう声をかけている」の肯定的評価が、前年度98%に対して、今年度は100%を達成した。	B	「スクール・ダッシュボード」による健康・生活アンケートや面談等を活用し、児童一人ひとりの心の健康観察を継続して行う。把握した情報をもとに、教職員による定期的な情報共有、保護者や行政との連携などを通して、今後も学校がチームで指導・支援していけるようにする。また、道徳教育を軸として、いじめ防止の指導を徹底し、児童の主体的な行動につなげる。	・丁寧な取組や対応が評価できる。多様性が認められる時代、一人ひとりや少数にしっかりと目を向けることが大切である。 ・全ての教育活動で「思いやり」や「優しさ」を児童に培っていくことが大切。学びの中にしっかりと位置付けていってほしい。 ・ルールの見直しが必要ではないか。子ども自身がルール作りに携わること、岸中学校区で、互いに理解しながら、系統性をもたせたルール作りができることさらによい。 ・教員に相談できない児童をPTAでもサポートしていきたい。
3	<現状> ○昨年度、学校運営協議会を年間3回実施。「付けさせたい力」「育てたい力」をもとにした熟議の結果、「高砂小コミュニティ・スクール推進プラン」を策定し、具体的な取組を検討することができた。 <課題> ○関連する学校評価アンケートでは9割以上の好評であるが、学校公開、学校Webページによる積極的な情報提供により、学校、家庭、地域が一体となった「地域とともにある学校」づくりを推進する必要がある。 ○学校運営協議会での熟議を踏まえて、具体的な取組や役割を具体的に話し合い、実施できるよう進める必要がある。	・目指す児童像を地域・保護者と共有するための教育活動の公開及び情報発信 ・高砂小コミュニティ・スクール推進プランの2年目の実施	①学校運営協議会や学級懇談会、学校公開等において周知し、目指す児童像に向けての取組を積極的に地域や保護者と共有できるようにする。 ②学校の活動の様子が伝わり、誰でも読みたいくなるような学校Webページのリニューアルとして、児童の活動の様子等をHPに月1回以上公開する。	①学校評価の保護者アンケート「目指す児童像を地域、保護者と共有することができた」に係る項目で、回答する割合が90%以上となったか。 ②学校評価の保護者アンケート「学校の教育活動を保護者・地域に積極的に公開」に係る項目で、回答する割合が90%以上となったか。	①学校評価の保護者アンケート「目指す児童像を地域、保護者と共有することができた」に係る項目で、肯定的回答が96%以上となった。 ②学校評価の保護者アンケート「学校の教育活動を保護者・地域に積極的に公開」に係る項目で、肯定的回答が98%以上となった。	A	学校行事について、ポストコロナに合わせて工夫を重ね、目指す児童像を地域・保護者と共有できるようにする。また、学校Webページを含めたICTを活用した情報発信を継続する。学級懇談会では、児童の様子を詳細に伝え、年間を通して繰り返し、目指す児童像の共有を図る。	・学校評価アンケートで、児童、保護者、教職員ともに「地域連携に係る」項目の肯定的な回答の割合が10ポイント前後向上したことが評価できる。高砂まつりをはじめ、様々な行事で地域、保護者、教職員が協力して活動できたからではないか。 ・小学生、中学生、高校生、大人と一緒に活動することでそれぞれにより効果が見られた。後輩は先輩への憧れをもって活動し、先輩は後輩に範を示そうと張り切っていた。交流の幅を広げたい。
4	<現状> ○各パートの教科等において、年間を通じて、一人1回以上、ICTを効果的に活用した授業を実施することができた。経験年数の浅い教員が、研修により、課題解決のための方策を講じた授業を実践できた。 ○教職員一人ひとりが業務改善の取組を実践した割合が9割を超え、ストレスチェックによる健康リスクを前年度より減少させた。 <課題> ○経験の浅い教職員や学習指導等に不安をもつ教職員への支援を継続して実施する必要がある。 ○学校評価の教職員アンケートによると、業務改善の関連質問について、概ねできているが、改善の余地があり、心の余裕の生まれる職場づくりの推進が課題である。	・意欲に満ちた教職員集団を醸成する校内研修の実施 ・教職員一人ひとりに応じた働き方改革の実施による、Well-beingな職場の構築	①ICTを活用した学びの改革を推進するための実践研究を、各パートにおいて行うとともに、一人1回、ICTを効果的に活用した授業を実施する。 ②管理職が経験の浅い教職員一人ひとりの学習指導等の実施状況を、毎月把握し、具体的な指導助言を行うとともに、学年教師によるOJTを進める。	①各パートの教科等において、年間を通じて、一人1回以上、ICTを効果的に活用した授業を実施することができたか。 ②経験年数5年未満の教職員が、学習指導等において、自らの課題を把握し、目標を立て、毎学期目標の達成状況を振り返ることができたか。	①各パートの教科等において、年間を通じて、一人1回以上、ICTを効果的に活用した授業を実施することができた。 ②経験年数5年未満の教職員が、学習指導等において、自らの課題を把握し、目標を立て、毎学期目標の達成状況を振り返った。	A	次年度も「教員の主体的変容」、「教員の元気」を基盤として研修を行い、互いを承認し、意欲に満ちた教職員集団を醸成する。若手教員の育成については、管理職とともに、学習指導等における目標を設定し、毎学期、目標の達成状況を振り返るなどして指導力の向上を図る。業務改善について、常に目的に立ち返ることで、教職員一人ひとりの意識の改革を行うと同時に、具体的な改善策を毎学期1回以上教職員で共有する場面を継続していく。笑いのある心の余裕の生まれる職場づくりを推進することにより、児童のために教員をはじめとした学校全体のWell-beingを高めるようにしていく。	・高砂小学校の教職員の雰囲気がよくできていると感じる。 ・ICTの長所をうまく引き出した授業を行っている。 ・公開研究協議会等の子どもたちの様子から、授業等でタブレット等のICTを効果的に活用することが有効であることが分かった。 ・特定の教職員に過度の負担がかかっているか心配である。

学校運営協議会からの意見・要望・評価等

